

篠原幸雄からやましたゆきおへ

# マンガと生きた50年

6

都立練馬高校という学校



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日(金)から29日(日)の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

**おやしマンガ同人誌**

つ 新つれづれ草

# マンガ展

篠原幸雄からやましたゆきおへ

## マンガと生きた50年

おやしマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料

イラスト：篠原幸雄  
(著者少年ジャンプ連載「男のつぎの犬五」)

**日時：10月20日(金)～10月29日(日)**  
午前9時より午後9時まで(最終日は午後5時まで)

**会場：森下文化センター1F展示ロビー**

**お問合せ：森下文化センター**  
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17  
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677  
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分  
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分  
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター







# 6、都立練馬高校という学校

1964年、団塊の世代の高校進学者数の増加に対応して、新設校として開校。1966年、東京都練馬区春日町に新校舎が完成した。校舎の周囲は畑が広がり、近所には自衛隊や米軍の基地があった。その年の四月に私は三期生として入学した。新校舎が完成し、はじめて一年から三年まで

三学年の生徒がそろった、記念すべき年であった。

前年の中学三年生の進路指導の時に、担任の先生から、受験勉強を頑張れば、2人の兄が行っている都立大泉高校（当時練馬区では上位の進学校）へ行ける可能性があるから頑張れと言われたが、私は出来たばかりで先生も情報を持っていない、新設校を自分で見つけてきて「練馬高校を受験したい」と、決めてしまった。先生は練馬高校なら、今の成績で合格できるだろうと、合意してくれた。

私は一人で自転車に乗って、建設途中の校舎を見に行き、何か新しいことが起きそうな感じがして、ワクワクしていた。予定通り、受験勉強はせず、マンガを描くことに夢中になって、練馬高校を受験し、合格し、新築のピッカピカの校舎の練馬高校に入学したのだった。

当時の私は全く知らなかったのだが、新設当初の練馬高校は、初代の校長先生が、若い個性的で優秀な先生を集めてつくった、都立高校としては先進的な教育を目指していた学校だった様です。

一年生の時は、陸上部に入りました。2人の兄が高校で陸上部に入っていたので、まねをしたのです。種目も中距離走の400メートルを選びました。これも兄のまねです。動機がこれですから、一年が終わるときに陸上部はやめました。

## レタリングデザイン同好会

美術部があったのに、それとは別に「レタリングデザイン同好会」が学校の同好会として認められていました。私と同じ学年のKsさんとSくんが一年生の時に頑張って作った様でした。

校舎は一年生から三年生までの各クラスの教室が入っている二階建ての建物と、校長室や職員室、事務室などの管理棟の二つの建物で構成されていて、それを二階建ての渡り廊下でつないでいました。

レタリングデザイン同好会は、その渡り廊下の二階通路で不定期に作品展示会を開催していました。同好会に入会した私は、自分の描いていたマンガ原稿を「マンガの描き文字がレタリングだ」として、自分の描いたマンガ原稿を展示していました。

ここで体験したレタリングの基礎知識は、その後、集英社の少年ブック編集部でマンガの持ち込みに行ったときに、最初にもらった仕事がマンガのカットではなく、読者ページのタイトルのレタリングの仕事だったことで、大きく生かされたことが分かります。

私にとって最も大きな出来事は、三年生になったときに、一年生で入会してきた数人の女生徒の中にいた、妻との出会いでした。

その後私が生きていくうえで、妻の存在の大きさは言うまでもありません。

## 文芸同人誌「磯枕」同人会

一年生の時に同級生だったSくんが、学校から借りた、ガリ板と鉄筆に原紙を使って作った、個人詩集のタイトルが「磯枕」でした。その詩集の最後に「同志求む！」の記載があり、それを見て集まった仲間が作ったのが、文芸同人誌「磯枕」同人会でした。

学校非公認のサークルなのに、なぜか堂々と学校の機材を使って何回も同人誌を作り、文化祭ではオリジナルの8ミリ映画を作って上映会までやったのです。

何かやりたい意志を持った生徒を全面的に支援してくれるのが、創立まもない練馬高校の校風でした。

そして、この時にその後の仕事のパートナーとなる大切な人との出会いがありました。

磯枕の中で、Kiくんはセンス豊かな詩を書いていました。また短い童話の様なポエムの様な小説の様な、不思議な作品を描く独自の世界を持っている人でした。

一方で彼は体操部の部長であり、放送委員会の委員長もやっている、多くの顔をもっている人でもありました。

卒業後2人は別々の道を歩み、十年近く会うことはありませんでした。全く偶然に私が実家に帰った時に、実家近くの道ですれ違ったのが運命的な再会でした。

その後Kiくんは欠くことのできない仕事上のパートナーとなってくれました。

## 数学のN先生のいよ

私が三年のときに、N先生は数学科の担当先生で数学の授業のときにしか会うことの無い先生でした。(当時一年生の妻の担当がN先生でした) 細身で長身に厳つい表情をされている、近づき難い先生という印章でした。

ある時、そのN先生から職員室に来るよう呼び出されました。「詩集を出すので装丁を頼みたい」と原稿用紙の束を渡されました。「日ごこの葬送」というタイトルの詩集でした。

怖い数学の先生と詩人という二つの顔の落差に、その時はただただビックリしていました。先生の詩は難しい言葉が並んでいて、私にはほとんど理解できなかつたと思いますが、それでも私なりに頑張つて装丁をデザインして渡しました。

その後十年ぐらい経つた時に、突然訪ねて来ら

れた先生は、詩集の第二集を発行するとのこと、再び私に装丁を依頼していただきました。高校生の時に作った装丁も、気に入って頂いていた、と分かつてうれしく思いました。

その後、N先生は三宅島の三宅高校に赴任されたと聞き、私は三宅島まで先生を訪ねました。自然豊かな三宅島は都会育ちの私には「第二のふるさと」だと思え、夏になると毎年の様に、三宅島と先生を訪ねる様になりました。

三宅高校に赴任された先生は、ほとんどの方がその任期を終えると本土に戻ってしまうそうですが、N先生は三宅島に骨を埋めると、火山の噴火で住むことが難しくなるまで、三宅高校の先生を続けていました。

## 国語の〇先生のこと

私が三年生の時、担任だった〇先生は、国語科の担当先生でもありました。

小学生の時から、漢字の書き取りがきらいだった私は、国語は好きな授業ではありませんでした。教科書に近代の小説が掲載されていて、その作品について読み解く授業がありますが、私は全く興味がありませんでした。

〇先生の、太宰治の「富嶽百景」の授業の時は、なぜか出てくるシーンの映像が目の前に広がり、心臓をわしづかみされてしまいました。古本屋で大宰の文庫本を片端から買いあさり、全作品を読んでしまったほどでした。

比較的小柄で、優しい声でポツポツと話す先生の授業は、特に目立った印象はなかったのですが、先生を慕う生徒は意外と多く、卒業して大分経つ

た頃から、有志が集まって「〇先生を囲む会」を毎年正月に行う様になりました。

その会は、〇先生から、高齢になって体力的にこれ以上出席できないと申し出があるまで続きました。

最後にお会いした時に、私から先生に、「高校三年の当時、先生から私のことはどんな生徒に見えていましたか」と聞いてみました。それに答えて先生は、三年の保護者会の後に、お母さんが先生に個人的に相談に来て「息子のマンガ家志望を止めることはできないでしょうか？」と聞かれたことがあったそうです。先生は「自分で決めた志を持った生徒を、私には止めることはできません」と答えたと教えてくれました。

父は、私の大学進学を希望していたので、マンガ家志望を反対していると思っていましたが、母はいつも私の味方だと思っていたので、先生の言葉で、「母は私の将来を心配して、マンガ家志望を止めたかったのだ」とその時はじめて知ることができたのです。

都立練馬高校での三年間は私にとって、2人の人生のパートナーとの出会いと、多くの人々の助けが私の夢を支えてくれ、次のステップに進むための準備と経験を私に与えてくれた、大切な時間でした。



私が入学した当時の練馬高校の校舎